

西南小の風

だれかのために じぶんのために いっしょうけんめい

朝の活気と 信頼と 安全と

西南小学校学校だより
田中 宏和
文責

令和5年5月15日
第4号

毎朝、正門で「おはようございます！」と呼びかけて約一ヶ月、日々ちよっとしたドラマがあります。

正門に立ち始めて約十日目、ある女子児童が私に握りこぶしを差し出しました。「おはよう。どうしたの？」と尋ねると、握った手を開き、おびたらしい数のうごめくダンゴムシを見せてくれました。私は「うわー！」と驚きつつも、大声で笑っていました。女子児童もいたずらっぽく笑いました。それ以来、ほぼ毎朝複数の女子児童からダンゴムシを見せられます。いつしかその子たちをダンゴムシクラブと名付けました。

ある日は、お母さんに連れられた一年生の女子児童が大泣きしていました。「ほら、いつてらっしゃい。」とお母さんは促しますが、なかなか教室に行こうとしません。その時そこでたまたま教頭先生と話していた私は、これは手強そうだなと思っていました。その矢先でした。「じゃあ、いっしょに教室行こうか？」と隣にいたはずの教頭先生がいつの間にか手を繋ぎ、その瞬間女子児童も泣き止みました。お母さんも、今がチャンスとばかりに「いつてらっしゃーい！」と手を振ると、女子児童は手を振り返して、若干の笑顔さえ見せました。まさに瞬間でした。中学校勤務が長い私には、教頭先生のその早業が魔法のようでした。

またある日は、二人の高学年男子児童が、いつもは来てるはずの友達がまだ登校してないからと、心配そうに正門まで見に来ました。「来るはずなんです。」と言いながら、そわそわと待っている、待ち人は家の人の車で登校してきました。

「おはよう！ なんしよったと？ 校長先生、この人です！ この人を待っていたんです！」
「寝坊した。校長先生、寝坊して遅れたのは私でございませぬ。申し訳ございません。」

待ち人と出会い、朝から笑顔が絶えない彼ら三人の、なかなかスパイスの効いたやりとりが楽しくなります。このようなドラマを日々重ねながら、少しずつ少しずつあいさつを返す児童が増えてきています。

先日、東海三さんが本校にご挨拶に来られました。多くの皆さんがご存じだと思いますが、地域で毎朝交通指導をされ、また、妙泉寺公園でも朝のラジオ体操を主催

みなさん、いい笑顔です！



されているバイタリテイ溢れる方です。毎朝、本校児童がよく挨拶をしてくれるからとでもうれいと言われました。一方で、実は地域からは逆の話を聞くこともあります。あいさつをしても、子どもから挨拶が返ってこない。実態としてどうなのでしょう？

私ははじめ自分に照れがあったせいか、なかなか子どもたちと目が合わず、子どもの笑顔もあまり見られませんでした。しかもなんとなく頬が痛かったので、笑顔が引きつっていたのでしよう。一週間も経つと私自身の照れはほほなくなり、子どもたちとも少しずつ目が合うようになつてきました。目が合うと百パーセントあいさつが返ってきますし、そのやりとりがほぼ互いの笑顔につながります。目が合うとうれいなのです。目が合わない子も少なくありませんが、それでも確実にこちらを意識しているのがわかることが多いです。いつか目が合うようになるのかもしれないし、目が合わなくて別にいいんです。私と目が合わなくても、家族や友達と目を合わせてあいさつをしているかもしれないし、途中で東海三さんや地域の方には、目を合わせて元気にあいさつをしているかもしれない。

私は、本校児童のほぼ全員があいさつができると思っています。根拠は、朝のあいさつが私に返ってくるのは四十〜六十%ですが、帰りに正門に立つと八十〜九十%が「さよならー！」とあいさつが返してくれるし、むしろ子どもからあいさつをしてくれます。

朝のあいさつがあまり返ってこない主な理由の一つは単に気分の問題だと思えます。朝のテンションの低さです。そしてもう一つの理由は、あいさつを交わす者の間に「信頼・安心」があるかどうかではないでしょうか。大人になれば、「信頼・安心」がなくなるとあいさつができません。社会性があるからです。子どもたちの「信頼・安心」の関係づくりを、日々のドラマのような関わりの中で進めながら、子どもの「あいさつ」を引き出したいですね。

今朝は、民生委員さん方が正門に立ってあいさつ運動をしてくださいました。いつもより賑やかな朝の風景でした。このようなあいさつや楽しそうな会話、笑い声が飛び交う活気ある朝を、今後も西南小全体で作りたいものです。

大感謝! 13日(土)は雨で美化作業は中止しましたが、応援委員さん方にお集まりいただき、作業を行いました。時間を過ぎても「もう少し」と作業をされる様子に頭が下がりました。厚く感謝申し上げます。